

『初会金剛頂經』における菩薩の出生について

乾 仁 志

『初会金剛頂經』(TS)には「菩薩」を示す言葉として、(a) bodhisattva, (b) bodhisattva mahāsattva, (c) mahābodhisattva という三種類の語がある。これら三語の用例を検討すると、TSの経作者は(a)と(b)に対して(c)を意識的に使い分けていることが分る。五相成身觀の段はその一例で、その他にも更に三例ほど見い出せる。その一つが今回取り上げる十六大菩薩の出生段である¹⁾。

そこで、先づ十六大菩薩の出生段の概要、並びにその主要な文段構成について取り扱い、その後に「菩薩」の語の意識的な使い分けについて指摘したいと思う。十六大菩薩の出生段の概要については、Śākyamitra (Ś) と Ānandagarbha (Ā) と Bu-ston (Bu) の三師の説明する所を簡単に紹介しておきたい。先づ Ś は金剛薩埵の出生段の終りで次の様に要略している。

「例えば、[毘盧遮那仏] この三摩地の中で心[真言]を生起する、心[真言]によって特殊な印を生起し、印を収斂してから拡大し、収斂し、毘盧遮那の手に住せしめる、その[印]から光線が出現し、それらの[光線]から仏身を生起し、それら[の仏身]によってまた一切世間界において仏の御事業がなされてから、[それらの仏身]再び集合して薩埵の身となって仏の心中に住し、感興語を説かれる、[薩埵]は自身の座に住される、[毘盧遮那仏]また三摩地によって[薩埵]を灌頂し、印を授け、[金剛]名を与える、[薩埵]は自身の印の事業を示し、また感興語を説かれる、という如く後に出現する十五の薩埵に対しては、ある場合には本文の繁を恐れて多くを語らなかったけれども、同様にまたこの次第の意味を實の如く十分に理解すべきである²⁾」

この Ś の要略文について、Bu は Ś は金剛薩埵の出生過程を十五段階に分けていると指摘しているが、これはあくまで Bu の解釈であって、Ś 自身がこの要略文によって明確に十五段階に規定していたとは必ずしも言えない。一方 Ā も同じく金剛薩埵の出生段の終りに次の様に要略している。

「この様に、世尊は吉祥金剛薩埵の所化たちを菩提心によく安立せしめんがために、金剛薩埵を策励すべく三摩地を現前される、その感興語[を説かんが]ために月輪[を生起し]、智金剛杵[を生起する]、大金剛杵の光線によって諸の如来[を生起し]、[諸の如来は]有情を利益し、普賢[となり]、その感興語[を説かれる]、[普賢は世尊から]

教勅を受け、灌頂され、円満の感興語〔を説かれる、以上〕によって生起と拡大と収斂と安住と堅固とを観想することが説かれている³⁾」

この様に、Ś にしろ Ā にしろ、金剛薩埵の出生過程をそれぞれ任意に要略していることから考えて、TS 本文の文段構成については更に考察する余地を残していると言わねばならない。

ところで Ā の要略文の特色としては、菩薩の出生過程を生起と拡大と収斂と安住と堅固という五つの方法によって観想を行なうと解釈している点が挙げられる。このことは別の箇所に、

「以上の様に、生起と拡大と収斂と安住と堅固とを観想することによって、曼荼羅最勝王の内容を示してから³⁾」

と述べていることから分る。Ā はこの TS の註釈に付随して、『一切金剛出現』(VU) という金剛界大曼荼羅儀軌を著しているが、そこでは次の様に述べている。

「以上の様に、金剛拳を究竟するまで、生起と拡大と収斂と安住と堅固になることと、毘盧遮那の心中に住する金剛杵の中に座して感興語を説くことと、灌頂の後に感興語〔を説くこと〕を認めるべきである⁴⁾」

この Ā の要略文に随って、Bu は菩薩の出生過程を七門によって解釈する。七門というのは、生起と拡大と収斂と安住と堅固という五門に、第一の感興語と第二の感興語の二門を加えたものを言う。但し、Ā 自身がこの要略文によって菩薩の出生過程を七門に規定していたとは必ずしも言えない。Ś の要略文同様、それはあくまで Bu の解釈である。Bu によると、この七門は金剛薩埵の場合広げれば十九門になり、月輪の生起と収斂と安住の三門を含まない他の十五尊の場合は十六門になるという。但し広げると言っても、この場合前五門を十七門あるいは十四門に広げるということであり、内容的に言って、この五門あるいは七門は菩薩の出生過程を次第通りに整理したものではなく、その構成要素を纏めたものと言える。Bu はこれとは別に、前記の Ā の要略文に従って VU の金剛薩埵の出生過程を十文段に区分しているが詳細は後日報告したい⁵⁾。

以上、三師の解釈を簡単に紹介したが、これらの考察だけでは TS の経作者の意図を汲み出すことは難しい。そこで、これらの解釈とは別に TS の十六大菩薩の出生過程の文段構成について検討した結果を簡略に示したい。

私見では、これら十六大菩薩の出生過程はそれぞれ大きく二段に分けられる。その判断規準は、A 段と B 段の初めにそれぞれ入三摩地が説かれていることと、その結果として感興語が説かれていることにある。その意味で、三摩地名と感興

語は両段それぞれの内容を総括するものと言える。

次に両段を細分化する場合、その判断規準は、各文節の冒頭に認められる *atha* の語にある。*atha* は「さて」とか「その時」などと一般に訳され、新しい文の先頭にあって先行する文との連繫を保つ接続詞的な働きをする。

この様に考えると、金剛薩埵の出生過程は大別すれば二段、細別すれば七段の文段構成になっていることが分る。そして、内容の構成要素に注目すれば、*Ś* や *Ā* や *Bu* の様に更に細分化することも可能となる。しかし *Ā* や *Bu* の言う如く、生起・拡大・収斂・安住・堅固と言っても、A段の三摩地名に「三昧耶の出生 (*-samayasambhava-*)」とある様に、この場合三昧耶を生起することが主要な目的であるから、基本的には七段構成になっていると言ってよい。但し金剛薩埵以外の他の十五尊の場合は、月輪の生起が省略されているため六段構成になっている。

以上の文段分けによって、金剛薩埵の出生段を例に考えると、次の様になる。

A. 大菩薩の三昧耶が出生する

1. 世尊の入三摩地によって心真言が出生する
2. 心真言によって月輪が出生する
3. 月輪から三昧耶形（印）が出生する
4. 三昧耶形から薩埵身が出生する

B. 薩埵に三昧耶を授けて灌頂する

5. 薩埵は自身の座に住して教勅を求める
6. 世尊は三摩地に入って薩埵に三昧耶形を授けて灌頂する
7. 薩埵は三昧耶形を受持して印の事業を示す

さて、金剛薩埵の出生段の中に「菩薩」の語の使用例を見ると、都合五例ある。ここで注目されるのは、前四例が何れも普賢大菩薩とあり、(c) になっているのに対し、最後の第五例のみ金剛手菩薩摩訶薩とあり、(b) になっていることである。金剛王以下の十五尊の場合も、前四例は何れも (c) になっている。第五例には (a) が一例、(c) が二例あるが、それ以外は金剛薩埵の場合と同様、何れも (b) になっている。この事実から想像すると、多少のばらつきがあるとはいえ、第五例は (b) こそが自然であり、(a) (c) はむしろ異例であって、これら三例は写本の伝わる過程で誤差が生じたのではないかと考えられる。註釈には原典の本文が全てに互って引用されている訳ではないので、この「菩薩」の語の使用例をはっきりと把むことは出来ないが、前四例の場合、大勢は (c) である。但し、第五例についてはほとんど触れられていないので把握できないが、*Ś* の註釈に見え

る僅かな例によると (a) あるいは (b) になっている。

以上のことから、五相成身觀の段同様、この十六大菩薩の出生段においても、経作者は (c) と (b) とを意識的に使い分けていることが分る。詳しくは後日に譲るとして、この使い分けがどのような意図の下にあるのか簡単に述べてみたい。

大菩薩といわれる場合、TS では基本的に大毘盧遮那たる大菩提心普賢大菩薩に由来する。大毘盧遮那というのは、所謂毘盧遮那如来の本質たる大菩提を指し、それは毘盧遮那如来を如来たらしめた根本原因に譬えられ、一切如来の心中、すなわち毘盧遮那如来等の心中に住しているものである。即ち五相成身觀によって自利を円満した毘盧遮那如来が大悲の力によって利他の円満相を示すためにこれらの菩薩たちを出生するに至った。十六大菩薩というのは、毘盧遮那如来が自身の心中に得た大菩提を利他のために十六の相に開示したもので、言わばこれらは毘盧遮那如来の内証を表したものである。A 段を見て注目されるのは、〔毘盧遮那如来より〕心真言→〔一切如来たちより〕月輪→三昧耶形→薩埵身といった俗諦でいう三昧耶が結局はまた毘盧遮那如来の心中に帰入すると説かれていることである。このことは、要するに大菩薩の三昧耶の出生が、毘盧遮那如来の心内の出来事であることを暗示している。それ故、心中に出現した薩埵身も毘盧遮那如来の内証たる大菩提 (mahābodhi) を自性 (sattva) とするものということで、大菩薩と表現されているものと考えられる。この場合、これらの三昧耶は毘盧遮那如来の大菩提と真言行者の菩提とを結びつける役割を果たしている。

次に B 段では、このような大菩薩が毘盧遮那如来の心より avatīrya (ava+tr) して、毘盧遮那如来より灌頂を受け三昧耶形を授かって、自身の印の事業（働き・功德）を示すことになるが、ここにいわゆるヴィシュヌ神の権化 (avatāra) 思想の影響のあることが予想される。そして金剛手菩薩摩訶薩としているのは、各薩埵がそれぞれの役割に応じて毘盧遮那如来より三昧耶形を授かって如来に代り利他の事業を示すという点に意図があると考えられる。

〈参考資料〉

1. Sarvatathāgatatattvasaṃgraha, 堀内校訂梵本 §§ 34～.
2. Kosalālaṃkāra by Śākyamitra, 東北 No. 2503. (Yi. 33b)
3. Tattvālokaṅkāri by Ānandagarbha, 東北 No. 2510. (Li. 51a, 100a)
4. Sarvajrodaya by Ānandagarbha, 東北 No. 2516. (Ku. 176)
5. Rdo rje thams cad ḥbyun baḥi rgya cher bśad bshin nor bu by Bu-ston,
東北 No. 5105. (Da. 141a～149a) (高野山大学助手)